
HIT WILD PITCHING!

七夜十歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H I T W I L D P I T C H I N G !

【Nコード】

N 2 1 5 7 C

【作者名】

七夜十歌

【あらすじ】

軟式野球。甲子園などとは違う、もう一つの野球。そこにあるのは、優勝を目指す、強い意志だった

ブローグ

甲子園

高校球児の憧れの場、野球の聖地

そして俺は今、そこにいる。

ゼロ行進を進める決勝戦、十二回裏の俺の打席で交代した投手

それは、見惚れてしまうようなサブマリンだった。

全く無駄の無いフォーム、アンダーでありながら速球。実際、俺は見惚れていた

その速球には『東の怪物』と言われる俺すらファールで精一杯だった
そして、彼が三球目を投げようとしたとき

「あつ……………」

突然の風の悪戯で飛んで行った、背番号『1』の帽子の下には

長くきれいな黒髪に、整った美しい顔

マウンドの上にいるのは

一人の、少女だった

終わらない甲子園

とあるお国のとある町。特に変わったようなところのない、いたって普通の私立大学。

そこに一つ、ひっそりとした部活があった。それもまた、変わったところのないただの野球部。

だけど二つだけ、たった二つだけ違いがあった。それは

軟式だという事と、熱い情熱。

HIT WILD PITCHING！第一部

少年 三神優^{みがみ ゆう}には悩みがあった。

それは就職ではなく学力でもなく、若さ故の過ちでもなく。

しかし、彼にとってはそれら以上に重要な事だった。それは、

部員不足

彼の所属する若波学園軟式野球部は、先日の練習試合にてエースが肩を壊すというアクシデントに見まわれた。元から人数が少なく、リリースすらまともにいない。つまり、いくら部員がいても、エース不在では試合どころかまともな打撃練習すらできないのだ。

しかし、素人を勧誘したところでろくに球が投げられるはずがない。葉桜が輝く5月、まだ戦果も上げないうちに……こんなに早く終わってしまうのか

そんなこと考えたのが、30分前。

優は今、キャンパスを走り回っていた。

「おい、アブねえぞ！」

「すいません！」

道行く人にぶつかりそうになりつつも、一向に足を止める気配は無い。

何故なら、今の彼の頭の中は「二年前」の風景しか映っていなかったのだから。

焼きつける太陽、ざわめく観衆、土に染み込んでも終わりの無い汗。そして、弓のようにしなる軀に、矢のような鋭い球。

其将戦神也

その戦神 「甲子園の天使」は、夏の風物詩とも言える甲子園の決勝、延長戦裏15回に現れた最強の抑え。しかし、天使は二度と現れず、その1回限りしか舞い降りて来なかった。

（いた　！）

学園内を走り回り、目当ての人物を見つける事ができた。

更に加速する優。その彼の手には、一枚の紙切れと写真。写真には、黒髪でロングヘアの少女。野球のユニフォームを着ている。

紙切れの方には殴り書きの名前が一つ。その名の持ち主は、美しい水晶が如く輝きを放つ。

そして、その名は

「 近藤晶！」

大きな声が、学園に響き渡る。。

そして振り向く、一人の美少女。

そこにはまだ、当時の空気だった。

マウンドの上、自信溢れる笑み。

強者の交わす、目線での会話。

「呼んだか？」

彼の直感が告げる。

二年前のあの日の続きが
あの日の続きが始まる、と。

あと一球という所で終わってしまった、

それは遠き戦いの丘で

キャンパスの一角、芝生のみ広場は公園と呼ぶには質素だが、広さに関しては十分だった。中には思い思いにシートを広げて昼食をとったり、ベンチに座り休息をとる者もいる。

二人もまた、例外ではない。

「人目に付くのは苦手だな。今後は気をつけて欲しい」
先に口を開いたのは、意外にも晶だった。

「あ、ああ。すまなかった」

ベンチに座り、温かいお茶の缶を手の中で転がす。暖かくなりつつあるからか、あまり売れないホットは熱すぎるくらいに暖められていた。

そしてまた二人は黙っていた。

ゆつくりと、涼しい風が吹き抜けていく。晶の長い黒髪がなびき、自然と目がいつてしまう。

意を決し、優が口を開く。

「あの……」

「ちなみに」

制するかのように強引に割り込む晶の言葉。

「野球はもうやらない」

「え……」

晶から発せられたその言葉は、これから告げようとするする全てを否定する事に等しかった。が、優はなぜ野球を嫌うかは理解できた。

南風に、日に焼けたマウンド

戸惑いと軽蔑の混ざった視線

観客席から飛び交う罵詈雑言

決して相容れはしない形と器

閉ざされた、栄光に輝く未来

もし自分が同じ立場なら、二度と立ち直る事はできないだろう。

それでも彼女は立ち上がった。ただ、野球と向き合える程ではなかっただけの話。

「それは」

自然と、口が動く。

言葉は流れるような頭を過ぎていく。

「まだ、野球が好きだからだろ。本当に嫌いなら、自分からそんなことは言わない。そうやって遠ざけて、逃げ続けて　おまえは今、楽しいか？」

そして、最後に。

「　笑えよ。まだ、笑えるなら。あの自信の固まりみたいな不敵で極上の笑みを、また見せてくれよ」

全てを話終えた。ただ思いつくままに話したせいか、文法なんてバラバラだし要点がいまいち掴めない。自分でそう思うのだから間違いない。

そして晶を見る。晶はただ驚いたように目を丸くして固まっていた。そして気づいたように言う。

「そうか。お前、あの時のか」

彼女の頭の中に、甲子園の光景が浮かぶ。

ふっ、と目を瞑り、ゆっくり話し出す。

「あの試合。今でもはつきり思い出せる。三振を奪い奪い、最後は運悪く大物怪物。あんな悪夢そうそう見られないぞ。だから負けまいと本気になった。真剣になった。なのに笑っちまってさ。そして」

晶は天を仰ぐ。左腕は光を遮るように額に乗せる。

「 お前まで、笑っていやがった」

さわさわと木を揺らす風。最後の呟きは、そのせいかつまく聞き取れなかった。

「あの頃は楽しかったのに、俺は」

手に持つ缶は、既にぬるくなっていた。

「なんでこんなこと、してるんだよ……」

運命の鐘は鳴り響く

家と学校の距離は近い。徒歩で15分くらいだ。

だから練習は毎日遅くまでやれたし、続けて飲み会に行くときもある（もちろん酒は丁重にお断りする）。

それにしても、今日は大変な日だった。

優は早く帰ってゆっくりしようと、練習に参加せずに家に向かった。この町 巳沢市は大きすぎず、それでいて小さくなく、有名とまではいかなくともそれなりに栄えている市だ。学園から家までの道のりも、ビルの合間を縫うような感じになる。

ただ昔からある町だからか、小さい団地が点々と存在している。本当に町中にあるというのに、周囲の開発が進んでもビルの建設側との騒ぎ等のことは一度もない。……おそらく、この土地に多いほどのとした性格のせいだろう。

そう言ってる俺の家も、当然町中にある。

団地の中といっても、素振りやピッチングができる程度の庭はある。お隣さん家にボールが飛んでいくのは……まあお約束だ。

「……ピッチャーいないのになんでボールが飛ぶんだろうな」

そんな他愛もない考え事をしながら歩いていると。すぐに家に着いた。

鞆から鍵を取り出し、門を開けてドアに鍵を

「……開いてる」

今朝締め忘れたかな……と自分に納得させてドアを開ける。中に入ると、整頓された玄関には見慣れない二足の靴。一つは男物のスニーカー、もう一つは真っ黒なハイヒール。

……ああ、またか。

あきれたようにため息を一つ。覚悟を決めて廊下を渡り、リビングへ移動する。

と、そこは優の想像通りになっていた。

「あれ、優ちゃんお帰り」

「おう、帰ったか優。遅い！ 遅いぞ」

テーブルの上にはいっぱい料理が並び、床には一升瓶が並んでいた。

そしてえらそうにソファーにふんぞり返る青年と、エプロンを付けた女性が皿を片づけていた。

優、溜め息一つ。

「……だから兄貴、使うなら連絡入れろって言ってるだろ」

「大丈夫。この家はいつもキレイだ！」

この馴れ馴れしい酔っ払いは兄の聖。勝手に家に上がり勝手に人を呼び勝手に騒ぎ出す迷惑な兄だ。これで仕事は一流だというのだから恐ろしい。

「キレイにしてるのは俺だ！」

「まあまあ優ちゃん、ちゃんと片付けはするから、ね？」

落ち着いて俺をなだめているのは秋津美沙さん。兄の腐れ縁で、勤め先の娘さん……まあ社長令嬢というやつだが、互いにあまり気にしていない。ちなみに、付き合ってる訳ではない。

兄はスーツの上を脱いでダラツとしている。男にしては長い黒髪は肩にかかるかギリギリで揺れている。優しい感じの顔つきだが、細身に見えて案外筋肉はついている。身長は175センチ程度。趣味は野球と酒、といったところか。

一方美沙さんというと、もう美人としか言えない。短く揃えた髪は艶があり光を反射するくらいだし、小顔できりつとした輪郭に暖かい目つきはギャップがあるがそれでいて魅力がある。女性では大きい方か、170近くある体は出ているところは出ていて一切の無駄は無い。スリーサイズまでは流石に知らないけど……趣味はやはり野球。もちろん見るだけだが。あとは確かビリヤードとダーツだったか。ちなみに今はTシャツにジーンズといった緩めの服装。会社で私服がおいてあるのはどうかと思うが……

「何、優ちゃん？ じつとこっち見て」

見ているのに気づいてさらにこちらをじつと見つめてくる。

「いえ、会社をそんなに私的に使っていいのかと……」

「あ、酷いな。それは言いがかりだよ？」

まさに「怒ってます」と言わんばかりに頬を膨らまし、指をピン、と立てながら指摘する。

「別に社長室の隣に部屋借りただけじゃん」

「ベッドにタンスにデスクに本棚にパソコンにテレビにゲーム機に、おまけに水道洗濯機乾燥機キッチンがあるのは最早住まいですよ！」あまりに自由すぎるこの人を止めることは誰にもできないのはこの部屋の通り。

優はお説教モードに入る。が、

「まあ会社側から何もなければ構いませんが、節度は持つべきですよ。社会人として……」

「あゝあゝ、聞こえない」

耳をふさいであゝあゝ言いながらキッチンに逃げていく美沙さん。一体いつまで子供なんだろうか……

「……兄貴、助けて」

「わはは、無理だ」

「……はあ」そして二人して溜め息。自由奔放な天然は、舵がなかなかとれないようだ。

部屋の片付けはあらかた終わり、本題に入る。

「それで、今日は何の用だ？」

「ん？ ああ……」

よいしょ、と声をかけて姿勢を直す。肘を膝につき、指を組むように手を握る。話がある時、兄は大抵この格好になる。

「実は近く、草野球の試合があつてな」

「ああ、前言ってたあれか」

兄の所属する草野球のチームはなかなか強く、今まで何度か大きな大会に出ていいところまで行っている。

「それで？」

「相手のチームはまあ強い方だが、ウチより格下だ。だけど、監督が相手さんのところに挨拶行って飲み会になっただが……そのときに言ってたんだよ、「強力な助っ人を呼んだんだ」って。ウチより弱いとはいえ、助っ人の実力は舐めてかかれない。と、そういうわけだが」

「なる」

つまり、相手の助っ人が怖いから手伝えということだろう。

「でも、こないだは自力だったよな？」

「ん、まあな……」

以前戦ったチームにも助っ人はいたが、自分達で戦っていた記憶がある。

「でも、相手が相手だからな。何せ……」

今まで済まなそうに下手に出ていた様子だったが、聖の目つきはいきなり挑発するような好戦的になり、顔を上げてこちらを見つめる。その顔は、悪戯する子供のように笑う。

そして告げる。運命を分けたその一言を。

「あの“近藤晶”だからな」

「っ……」

いきなり出てきたその言葉に驚きを隠せない優。目を開き、信じられないといった表情で聖を見ている。

（助っ人が、近藤……）

頭の中で言葉を繰り返す。やがて優は全てを悟る。

ソファアに座り直し、ジッと聖を見つめる。

そして優もにやりと笑う。

「このお節介」

「これでも兄弟は愛しているさ。今贈れる最高のプレゼントだと思うけどな」

「 ああ、間違いないよ」

優の兄である聖も当然、「二年前」の事件を知っている。
だからこそ、あの時の続きをさせたいと強く思っていた。それは兄だからこそ分かる、弟の心の内。

「そのお膳立て、不本意ながら乗らせてもらっよ、クソ兄貴」

「だと思っただよ。せいぜい負けんじゃねえぞ、愚弟」

男にしか分からない言葉がある。交わされた悪戯の笑み。それだけで二人は既に互いの内を理解していた。

優は二階に、聖は玄関へと向かった。

「あれ、優ちゃ」

「美沙」

キツチンの片付けを終え、優と出くわして話しかける美沙を聖が止める。

「ここからはあいつらの世界だ。もう近づかない方がいい」

「？ どゆこと？」

よく分かっていない美沙に説明するわけでもなく、聖はただ弟の背中を見つめる。その目はまるで、息子を見守る父親のようだった。

優

お前は二年前から止まったままだ

だから、どんな結果だとしても受け入れる

だからこそ

「 勝てよ、優」

（ ああ）

既に二階にいる優に聞こえるはずはない。それでも聖の耳には、固い決意の言葉がしっかりと聞こえていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2157c/>

HIT WILD PITCHING!

2010年10月11日19時16分発行